



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 『蒼き狼』論争のために                                                                       |
| Author(s)        | 柴口, 順一                                                                            |
| Citation         | 国語国文研究, 106, 11-24                                                                |
| Issue Date       | 1997-07-30                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/94767">https://hdl.handle.net/2115/94767</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | kokugokokubunkenkyu_106_11-24.pdf                                                 |



## 『蒼き狼』論争のために

### はじめに

論争は、常にとはいわないまでも皮肉や揶揄を含む。ときには露骨な嘲笑や侮蔑をも避けない。われわれは、たとえば昭和初年代のプロレタリア文学の人々を中心とした数々の論争、あるいは戦後のいわゆる民主主義文学派と『近代文学』派の人々を中心とした数々の論争を知っている。はたまた花田清輝と吉本隆明の、悪口の展覧会ともいふべき激越な論争をも知っている。それら多くの論争に比べれば、大岡昇平と井上靖のいわゆる『蒼き狼』論争はごく穏やかな、むしろあつさりとした論争であつた。皮肉や揶揄がなかつたわけではない。また争点となつた問題そのものも決して小さくはなく、むしろ極めて大きいかつ重要な問題であつた。にもかかわらず、というべきかあるいはそれ故にというべきか、論争はあつてなく終わりを告げるのである。これまでしばしば言及されることがあ

### 柴 口 順 一

りながら、実質的な論争の検討がほとんどなされてこなかったのがあるいはそのことと関係しているかもしれない。

私は以前に、大岡昇平における歴史というテーマを検討する上でこの論争に触れた。<sup>1)</sup>『蒼き狼』の典拠である『元朝秘史』の読みという問題に焦点をあて、双方の主張を検討し私なりの位置付けを行なつた。今年（一九九七年）になつて曾根博義「『蒼き狼』論争をめぐつて——井上靖の歴史小説と大岡昇平の歴史小説論」（『新潮』、97・1）が出た。当時の文学状況等を考慮に入れた詳細な論で、これまでとは異なる新たな評価を提出したものである。拙稿とは結論において対立し、その他細部についても対立する点が少なくない。拙稿への言及も含まれている。反論を試みようとするゆえんである。

### 一

曾根博義の論は、『新潮』新年特大号における「特集歴史と文学」

のなかの一つである。「対談」二つに「評論」三つ、加えて「エッセイ」五つから成る。周知のように、歴史と文学という問題についてはこれまで様々な雑誌で特集が組まれてきたが、今回のような大々的な特集は特に近年においては出色のものといつてよい。だが、その実質ということになれば、全体としては残念ながら否定的な評価を下さざるを得ない。全十編のうち五つが「エッセイ」だからといったようなことではむろんない。一言でいえば、その多くがこれまでの歴史と文学に関する様々な議論をおさえた上での発言とは思えないのである。そんななかで、曾根の論は歴史と文学に関する具体的な論争をいわば論争的に扱ったものとして注目すべき論であることはまちがいない。

曾根博義は、『蒼き狼』論争に関してのこれまでの「通説」に疑義を提出している。その「通説」とは、「結果は大岡昇平の圧倒的な勝利で、大岡昇平の批判に屈した井上靖は、その後の歴史小説の書き方を大岡の批判を受け入れる方向に改めて、よりすぐれた作品を書いた」というものである。それに対して、「私はこういう評価が通説として堂々と罷り通っていることがおかしいと思う。結論を先にいえば、私の見るところ、論争に勝ったのは大岡昇平ではなくて井上靖である。」というのである。だがここで注意しておきたいのは、曾根はこれまでの「通説」を実は全面的に否定しているわけではないということである。すなわち、論争における「大岡昇平の圧倒的な勝利」は否定するが、井上靖が「その後の歴史小説の書き方を大岡の批判を受け入れる方向に改め」たことは否定していないのである。「井上靖は論争後、結果的には確かに以前より史料に忠実な書き方

歴史小説を書くようになった。」と後で述べている。これは、『鑑賞日本現代文学27巻 井上靖・福永武彦』（角川書店、'85・9）、「井上靖における《歴史》」（『現代文学研究シリーズ16 井上靖』、尚学図書、'86・5）から、「歴史と物語——「ロマン」の風化」（『国文学』'95・7）、そして今回の論に至るまで曾根の一貫した見方である。その意味では、先の「通説」の一半を作り上げたのは、少なくともその一端を担っていたのは曾根自身であった。

「通説」についての捉え方そのものに異議はない。私も同様、そのような「通説」をおかしいと思っていた。しかもほとんど具体的な検証がなされぬままに、まことしやかに流通していることがである。だから私なりの論を書いたのである。私がそこで行なおうとしたことは、論争をまさに論争として評価することであった。というのも、この論争は後の大岡の歴史小説論や実作である『天誅組』、『レイテ戦記』等から遡及的に位置付けられることが多かったからである。そのようなやり方がある意味ではこの論争を卑小化し、そこから発展的に問題を引き出すとする芽を摘み取っていたという側面は否定できないのである。ありていにいえば、大岡がその論理性と論争の展開において圧倒的な優位性を示していたあまり、細かな検証をおこたり、そのためにやや過剰に優位性を強調するだけで終わっていたのである。それは、一方の井上を必要以上におとしめていたことでもあることはいうまでもない。曾根は、私の論争評価の一部を引用した後次のように述べている。「もちろん、柴口順一は大岡昇平の側の「粗雑」さも併せて指摘し、論争の結果、井上靖の歴史小説の書き方が変わったという説には異議を唱えているが、論争そのものの評

価については右の通りなのである。」(傍点は引用者。以下断わりのない限り同様。)

これはほぼ正確な要約である。ただ、やや瑣末にわたるが傍点を付した「もちろん」が、私にはどうもピンとこなかった。というのは、それ以前に大岡の「粗雑」さや『元朝秘史』の読みのまづきを具体的に指摘したもの、そして井上の歴史小説の書き方が変わったわけではないこと、むしろ変わらず一貫していたのがその特徴であることを主張したものを、寡聞にして私は知らないからである。つまり、これはそれまでの「通説」に対するはつきりした異議申し立てなのである。「もちろん」は、「もつとも」とでもいうべきではないかというのが私の語感だが、もちろんこれは枝葉である。曾根がいたかったことは要するに、「通説」の一部である「大岡昇平の圧倒的な勝利」はあやまりで、「勝ったのは」井上靖の方だという点にある。私は「勝利」とか「勝った」とかいうことばを使つた覚えはないが、ことばの問題はともかく、拙稿が全体として「大岡昇平の圧倒的な勝利」を述べたものか否かはもはや読む人それぞれの判断にゆだねるしかない。

曾根も引用していたが、私は井上靖の論に対して、「とうてい大岡の論争の相手ではないという感否めず」、「反論というにはあまりにもお粗末なものであつたといわざるを得ない」と述べた。またそれに対する大岡昇平の論について、「先の論での主張を確認しながら井上の論をほとんど完膚なきまでに論破しつつしているといつてよい」と述べた。曾根が反発するのはこのようなものいいにあるのだろう。私がするように述べたのは、井上の論が、大岡に対する反論

を意図して書かれたものにもかかわらず、実際は大岡の疑問に対する正面からの反論にはなっていなかったからである。つまり、以前に発表した自作についての解説「蒼い狼」の周囲 成吉思汗を書く苦心あれこれ」(『別冊文芸春秋』、60・6)を大量に引用しながら、自分はどのようなつもりで書いたのかを主張することに終始していたのである。井上はたぶんそうとは考えていなかったであろうが、大岡にとってそれはぐらかし以外のものには映らなかつたはずである。大岡が余裕をもって、だがいらだちを隠し切れずに再論を試みていたのはそのためである。大岡がもともとと問題にしていたのは、作者がどのようなつもりで、またどのような意図で書いたかに関わりなく、実際どのような作品になり得ていたのかということだつたからである。

しかし、現象面だけにとらわれては本質を捉えそこねるおそれがある。是非とも検討してみなければならぬことが未だ残されている。それが、『元朝秘史』に対する両者の読みという問題であつた。大岡は『蒼き狼』の主資料である『元朝秘史』の記述の改ざんを三点指摘していた。具体的な指摘ゆえ、井上もこれについてはいちいち取り上げ反論を試みている。だが残念ながら、それらはいずれも大岡の疑問をはらすような説得的な弁明にはなり得ていないのである。だが一方、大岡の推測していたそれぞれの改ざん理由も、必ずしも妥当なものばかりではなかつたのである。それは、『元朝秘史』の読みの不充分さに関わっていた。したがって、井上は大岡の『元朝秘史』の読みに対する反論はできたはずなのである。そうであるなら、自己の改ざんを積極的に弁護はできないまでも、大岡の推

論をある程度反批判することはできたのである。井上がそれを行なっていたならば、大岡の再論はもつとちがったものになっていたはずで、そこから『元朝秘史』の読みをめぐって新たな論争が展開することもあり得たであろう。そうならなかった責任はやはり、自分はどのようなつもりで書いたのかということをくりかえすのに忙しかった井上にある。要するに、井上も『元朝秘史』を読み得ていなかったのである。だが、大岡にもその責任の一端はあるのである。

井上にとっては、大岡の指摘は実に些細で瑣末なことに思えたであろう。もともと『元朝秘史』の記述をいわば忠実に作品化したわけではない作品のごく一部の語句の変更を指摘されたと感じたであろうから。しかし、大岡のいいなかったことはむしろ単なる語句のレヴェルの変更だけにあったわけではなく、井上の『元朝秘史』の読みという問題であった。述べたように大岡のそれにもまずい点があったのだが、井上には実は決定的といってよい読みそこないがあったのである。

『蒼き狼』という作品の最大のモチーフは、自分ははたして蒼き狼の血を引いているのかということに悩む成吉思汗が、みずからの行為によってその血を証明しようとするにある。だが、そのようなことがあり得ないことは、『元朝秘史』を読めば明らかなのである。大岡が指摘したようにそのようなことはどこにも書いていないといったことではない。そもそもそのような発想をすることがあり得ないのである。なぜなら、成吉思汗は実際蒼き狼の血を引いてはおらず、彼自身もそのことを知っていたからである。『元朝秘史』は冒頭、蒼き狼と惨白き牝鹿から生まれたバタチカンの誕生からはじま

り、以下えんえんと直系の血筋をたどる。だが、十一代目のドブン・メルゲンに至り、その妻アラン・ゴアは夫の死後、「日月の光」と交わり新たに三人の子を生む。そして、成吉思汗へと続くのはその「日月の光」とのあいだにできた三番目の子ボドンチャル・モンカクであった。この話しは、蒼き狼の話とともにモンゴル部族に伝わるいわば二つの始祖神話なわけで、成吉思汗が意識するとするなら当然この「日月の光」の方でなければならず、もともと血を引いていない蒼き狼を意識するはずはもとよりないのである。

しかしこれらのことは、実は『元朝秘史』をわざわざ開いてみてはじめてわかることではないということに、更なる重大な問題があった。すなわち、作品『蒼き狼』において井上は、そのことをほぼ原典どおりに書いていたからである。しかもそれは、部族の古老がいまだ鉄木真のころの成吉思汗に語り聞かせる話として描かれていた。古老ブルテチュ・バガトルは次のように述べていた。「ボドンチャル・モンカクの流れを汲むわれわれボルジギン氏族の者の躰には、だから、美女アランの血と天の光が入り混じってはいっているわけじゃ」。にもかかわらず、なぜ成吉思汗はそれに興味を持たなかったのかということになるのだが、作品では次のように記される。「語り手が誇りやかに話すその話も狼と牝鹿の話に較べれば、遙かにつまらない光のないものに思われた」と。つまらないと思わせるのは自由だが、しかしそこから自分がはたして蒼き狼の血を引いているか否かに悩むことは絶対に起こり得ないのである。これはほとんど作品の破綻というべき欠陥といつてよいであろう。歴史をもとにして、あるいは資料をもとにして書くことがいかに難しく、また恐

ろしいことであるかを示す例である。大岡も、井上に対するこの破壊的な批判になり得る点については気づかず指摘し得なかったのである。

私は、「大岡昇平の圧倒的な勝利」を述べたわけではなかった。むしろ、論争の実質を探るならば決してそうはいきれないことを、「通説」に反して主張したのである。それが、この論争をできる限り生産的に評価する方法でもあったからである。ただ曾根がいうように、井上の方が「勝った」とは主張しなかったことは確かである。

曾根と私の対立は結局、論争において井上靖が「勝った」か否か、そして井上の歴史小説の書き方が変わったか否かの二点にある。主として論じられているのはむしろ前者である。私もその点にしぼって、以下反論を試みようと思う。が、その前にもう一つ触れておきたい点がある。曾根は、「勝ち負けだけにこだわっているわけ」ではないと述べている。それはもつともなことである。また、「二人の対照的な人柄の品評で論争の勝ち負けを決めたいというのではない」とも述べている。これまたもつともである。ただ、そういういつ次のように述べていた。「大岡昇平が勝ったように見えるのは、大岡昇平だけが戦闘的で、口数が多く、論争の後もお執拗に井上靖を攻撃し続けたからである。それに対して井上靖は、最初に一度だけ正当な反論を返しただけで、その後は大岡昇平の口汚い攻撃に対して沈黙を守り通した。井上靖の反論のあまりの礼儀正しき、紳士ぶりは大岡昇平を苛立たせたようだが、その後も井上靖は毅然とした態度をとり続けた。」

いうまでもないことだが、「戦闘的で、口数が多く」、「執拗に」、「攻

撃し続け」れば論争に「勝ったように見える」わけでは必ずしもない。むしろその反対の場合であることが少なくない。大岡昇平は確かに「口数が多」かったといえざるかもしれないが、他の多くの論争に比べて特に「戦闘的で」あったわけでも、また特に「執拗に」攻撃し続け「たわけでもない。井上靖の反論は確かに「礼儀正し」く「紳士」的であった。それは大岡も論争において讀んでいるくらいである。だが、ただ「沈黙を守り通」すだけでは結局論争は成り立たない。それは決して「毅然とした態度」とはいえないのである。

## 二

述べたように、曾根の結論は「論争に勝ったのは」井上靖であるという点にある。しかし実際の論は、いかに井上靖が勝ったかというよりは、実はいかに大岡が勝っていなかったかということの説明に終始している。一方の「勝利」をどんなに否定しても、もう一方の敗けでないことは証明できても「勝利」を証明することはできないのが道理で、そもその論の展開自体が結論への道からへだたっているのである。そして、それぞれの大岡「勝利」否定の論点にも無理があることはいうまでもない。

曾根は、はじめの大岡の論とそれに反論した井上の論の二つをまず簡単に要約する。その要約にとりたてて異論はない。だがその後、に、「要するに大岡昇平は『蒼き狼』が『元朝秘史』の記述に忠実でないから、史実を改変していることになり、歴史小説とはいえ

ないといっているわけだが、……」と述べている。この要約はあやまつてゐる。だが、それはいつかあやまつてしまつたものではない。このいい方が成立するためにはまず、『元朝秘史』が何よりも「史実」でなければならぬ。でなければ、何もそれに「忠実」でなくとも「史実を改変していること」にはならないからである。しかし大岡は、『元朝秘史』を「史実」だとはいっていない。あまつさえ次の論で、「元朝秘史」の記述が史実だとは、私はどこにも書いていない。「原文」と書いただけ」だと念をおしているのである。先の要約は以上のことを全ておさえた上での曾根流の要約にすぎない。つまり曾根は、大岡の発言は「強弁にすぎない」というのである。

論争における、あるいはその後の歴史小説論における大岡の発言を丹念に見ればわかることだが、大岡はことば遣いにはかなり意を用い、ことばを選んで発言していたことは一般の論争者と変わりはなくない。というよりはむしろそれ以上である。大岡は、『元朝秘史』をいわゆる「史実」と捉えて議論されてはたまらないから「原文」ということばを選んだのである。そもそも大岡は、最初の論においては「史実」ということばを論全体から拒否さえていたのである。最後にただ一度だけ、しかも井上を批判する文脈において用いていただけである。それを知つてか知らぬか、「史実」ということばをふんだんに使つてゐたのは井上の方であつた。

大岡の言を「強弁にすぎない」とする理由は二点上げられてゐる。一つは、『元朝秘史』の性格を「古事記」とほぼ同じ目的で成立した王家の歴史だ」という大岡の発言を捉えて、これは「その記述が

必ずしも史実ではないことをいうためではない。」というものである。二つ目は、「その証拠に」と続けて「このあと『蒼き狼』が歴史小説ではないことを「実証」しようとして大岡昇平が引き合ひに出すのはもつぱら『元朝秘史』の記述なのである。」というものである。大岡の発言は確かに「史実ではないことをいうため」のものではない。しかしそれと全く同様に、「史実」であることをいうためのものでもないのである。だからこそ、「古事記」という性格の本を引き合ひに出しているのである。二点目について、この指摘は事実としてあやまつてゐる。曾根の文脈に即してあえていいかえれば、傍点の「歴史小説」を「史実」ないしは「歴史」とでもすべきかとも考えられるが、むしろその場合でも正しい指摘にはなり得ない。

以上のことから、大岡の主張のあやまつた要約として先に引用したものに続く次のような方がいい方が、もはや意味をなさぬことは改めていうまでもない。「……、『元朝秘史』そのものが成吉思汗研究の不可欠の史料ではあつても正確な史実を記したものではないとすれば、大岡昇平の批判はまったく的外れということにならざるを得ない」。曾根は更に続けて、「井上靖の反論を読んで大岡昇平自身すぐそのことに気がついたはずだが、最初に意気込んで攻撃した手前、引つ込みがつか」なくなつたと述べているが、そのようなことがあり得ないことは断言してかまわない。

ところで、今先に触れた見方は、曾根のいわば独創ではないといふ点では曾根だけがあやまつてゐたわけではない。自身言及もしてゐたように、護雅夫は『元朝秘史』は、「史実」を忠実に叙述した歴史書ではなく、それ自身が歴史的物語文学、歴史文学作品」であ

り、「万一」、「蒼き狼」が、『元朝秘史』の叙述とは違っているという理由から、その「歴史ばなれ」の甚だしさを非難するものがあるとするならば、それは、事実を知らざるものとしてかえって非難されねばならぬ。」と述べていたからである。曾根は自説を補強しようとするためからか、「トルコ学者」で「専門家の立場から証言された」ものと断わった上で護雅夫の論を長々と引用していた。もちろん、「専門家」の意見には耳を傾けて然るべきであることは言をまたない。だが、この種の議論では、「専門家」の意見をあたかも切り札のように無条件に尊重しようという傾向がなくもない。たとえば菊地昌典に対する見方にもそれはいえ、大岡も少なくともそのはじめにはそのような趣きがなかったわけではないが、それについての批判はかつて述べた。

続く大岡批判は、「論争の後もお執拗に井上靖を攻撃し続けた」事実についてである。それについては先に述べたが、一言付け加えておけば、それだけ「執拗」な「攻撃」に対して「沈黙」（あるいは無視）し続けることは、表現者としての責任を放棄するものではないかというのが私の感想である。もともと、義務はないといえればそれまでのことなのだが。事実の指摘としては基本的に何もいうことはない。ただ、書誌的な点で一つ確認しておきたいことがある。大岡昇平は再論において、井上は「頭口を害う狼」を滑稽にも「頭を害う山犬」と書いていた。（傍点は大岡）と指摘していた。それについて私は、初出『文芸春秋』では「頭口」となっていると指摘し、連載直後に出された単行本では「頭」となっていることを考えれば、大岡は単行本しか見ていなかったのであろうと述べた。それに対し

て曾根は、『文芸春秋』の初出でも「頭」であり、私の「単純な見間違い」であると指摘している。

この指摘を読み、私はわが目を疑った。というのも、拙稿では大岡の引用のいかげんさにいささか辟易していたこともあり、何度も確認した記憶があったからである。それでもむろんまちがいはあり得る。そこで改めて確認したところ、私の指摘はまちがいでなかったが、同時に正しくもなかったことがわかった。というのは、作品における該当箇所が実は二箇所あり、一方は「頭口」、もう一方は「頭」となっていたのである。大岡が問題にしていたのは現行「一章」における、いまだ鉄木真の頃の成吉思汗によるベクトル殺害後の母親の叱責の場面で、そこでは確かに「頭口」となっている。だが、現行「四章」で成吉思汗がカサルを縛る場面で再び同じことばが母親の口から発せられる際、「頭」となっているのである。それを見落していた私の非はむろん責められて然るべきであり、そのことに気づかせてくれたことを卒直に感謝したい。しかし、であるなら同じように先の指摘もまたまちがいでないが正しくもなかったということになるのだが、ここではそう断言することは控えたいと思う。そうではない可能性が一つあるからである。すなわち、初出『文芸春秋』に複数の印刷があつたことである。ある種の雑誌に複数版あるいは複数刷のある例は知っているが、そのような例を浅学にして私は知らない。しかし私は、はじめは本当にそれしか考えられないかと思ひ、また今でもその疑いを消し得ないである。「見間違い」の指摘において見まちがえることは、しかも大岡が直接問題にしていた方を見まちがえる（見落す）ことは、どう考えてもありそうな

ことではないからである。誤解のないようにいい添えておけば、私は大岡が見まちがつていたと指摘していたわけではない。別のテキスト（単行本）を見ていた、しかもそれしか見ていなかったのだろうと述べただけである。

いずれにしても、御本人の教示を仰ぐしかない。やや瑣末な点に言を費やしてしまった感はあるが、曾根もこの点に関する後の大岡の発言については書誌的にかなり詳しく述べ批判していた。そこでの指摘により、大岡の発言に事実関係においてあやまりがあつたことが明らかにになったことは収穫である。

### 三

以上見てきたところで論はちょうど半分を終わる。なかじきりといふことか、再び次のように述べられる。「問題は、『蒼き狼』論争とその後の双方の態度が以上のようなものだったにもかかわらず、あたかも大岡昇平が井上靖を完膚なきまでに論駁した結果、井上靖は大岡昇平の前に屈服し、歴史小説に対する大岡の考えの正しさが証明されたかのごとき誤った説が流布し、いつの間にか戦後文学史の常識にさえなってしまうというものである。」

「論争とその後の双方の態度が以上のようなものだった」と前半をまとめているが、「その後の」「態度」について検討されていたのは見てきたとおり大岡だけで、決して「双方」ではない。それは当然で、井上は「その後」何も発言しなかったからである。だが、「沈黙」もまた一つの「態度」であることを認めよう。しかし、肝心の「論

争」の方は、両者の主張をごく簡単に要約し、先に見たような前提に立つて大岡を「まったく的外れ」と断じていただけなのである。

しかも曾根が要約していたのは大岡の最初の論だけで、例の「元朝秘史」の記述が史実だとは、私はどこにも書いていない。云々という前論の確認の発言以外、再論については何ら具体的には触れられていないのである。大岡の引用は、それ以外全て最初の論からの引用である。井上の発言に直接反論した最初にしてかつ最も詳しい（他の発言に比べて桁ちがいに）再論を問題にしない限り、たとえば「大岡昇平が井上靖を完膚なきまでに論駁した結果」が見えてこないのはけだし当然のことであろう。以後も、再論についてはついに触れられることはなかった。

曾根は、大岡の「その後」を追求するあまり、本来の「論争」の方をいささかないがしろにしたといわざるを得ない。そのことが、そして更には井上の「沈黙」を「毅然とした態度」と評価してはばからない在り方が、次のような驚くべき発言として現われたと見ることができる。先の引用にすぐ続けて、「大岡昇平の度重なる発言以外に評価を決めたはつきりした証拠があるわけではない。」とある。論争評価のためには論争における発言だけではなく、その他様々なことがらを考慮に入れて総合的に判断しなければならないことはもちろんである。しかし、論争はあくまでも論争における発言が基本であること、とりあえずはそこからはじまらなければならないこともまた言をまたない。一方がただ一度の反論で「沈黙」すれば、いきおいもう一方の発言が多く評価の材料にされることは当りまえのことであろう。仮に、それが評価を決める「はつきりした証拠」に

はなり得ないとしても、それをおいてより「はっきりした証拠」といったものを、それではいったどこに求めればよいのか。もはや論争でも何でもないという外はないであろう。

驚くべき発言は更に続く。『蒼き狼』が連載中から「読者の人氣」を呼び、「文芸春秋読者賞」を受賞したこと、完結後の文芸時評では中村光夫や江藤淳の「絶讃」を浴びたこと、そして単行本出版後も「傑作との呼聲」が高かったことを指摘した後、次のように述べている。「そのような作品を大岡昇平はなぜこのように激しく、執拗に攻撃しなければならなかったのか」と。大岡がなぜ「激しく、執拗に攻撃しなければならなかったのか」というのは正当な疑問である。答えはむろん用意されている。「井上靖だけでなく、井上靖を褒めちぎっている批評家たちをも、併せて批判しようと考えたからに違いない」と。私も同じように考え、またそう述べた。だが、「大岡昇平が『蒼き狼』を批判、撲滅しなければならないと考えたのは、実際に『蒼き狼』を読んで駄作だとか失敗作だと思ったからではおそろくない。」というのはいったいどういうことか。

私は、批評家の賞賛がなければおそらく大岡は『蒼き狼』への批判は書かなかったであろうと述べた。「駄作」とか「失敗作」とはいわないまでも、評価に値しない作品をいちいち取り上げてはきりが無い。ところが、あろうことか『蒼き狼』は「絶讃」を浴び、「文芸春秋読者賞」なるものまで受賞する。それではたまらないから、それだけの作品ではないのだ、むしろダメな作品なのだといおうとし、また同時に「絶讃」した批評家をも厳しく批判したのである。「そのような作品を大岡はなぜ」といつていたが、「そのような作品」

であるがゆえに、大岡は「激しく、執拗に攻撃しなければならなかった」のである。これが、ごく普通の展開のように私には思われるのだが、むろん世の中には普通でない場合もある。屈折した展開を見せることも稀なことではない。大岡の場合、まさにそうした展開を見せていたのだというのがいわば曾根の見方である（曾根は屈折ということばを使っているわけではないが、そう見るのは、たとえば大岡の次のようなものいいからである。『敦煌』以来批評家の筆を揃えての絶賛に気を悪くしていたし、嫉妬もあつたから、これは書き易かった。作者の井上氏には少し気の毒だったが、……。あるいは、昨年中から大衆文学、中間小説の文壇主流進出を認容する論調があつた。」「……、われわれの伝統や世界文学に関する知識に基いた文学の理念をこわして、これを擁護しようとする批評家が一部にあつた。」「私はそれらに対して、文学の原理を争うのではなく、諸君の礼拝している淫祠邪教の実体はこれなのだ、と摘発する方法によつた。そのため数々の面識ある作家諸君に、文壇の慣習に反して、不遠慮な批判を加えなければならなかつた。」

あまり長くなるので、引用されている部分全てを再引用することはしなかつた。だが、これでおおよそは足りると思う。あるいは、ということばで区切つた前半が「常識的文学論」の最終回（群像、'61・12）、後半は単行本「常識的文学論」（講談社、'62・1）の「序」からのものである。いずれも、またしても「その後」の発言であるが、もはやとやかくはいわない。大岡が『蒼き狼』を「駄作だとか失敗作だと思つた」のではないと見るのは、たとえば「批評家の筆を揃えての絶賛に気を悪くしていたし、嫉妬もあつたから」とい

ういい方や、「井上氏には少し気の毒だった」といういい方にあるのだらう。あるいは、「文学の原理を争うのではなく」や「不遠慮な批判を加えなければならなかった」といういい方にあるのであらう。

このようなものいいから、先のような結論を導き出すことが不可能だとは思わない。しかし、それはもしかしたらそうだったかもしれないがそうではなかったかもしれないという程度のことにはすぎない。ましてや、次に述べている『蒼き狼』が文学としてすぐれているかないか、歴史小説であるかないかは、実はどうでもいい問題だったのだ。」という結論へは、はるかなへだたりがあるとしかしいようがないのである。またしても、大岡が論争において述べていたことはいったい何だったのだろうかと慨嘆する外はない。

先の大岡の発言から曾根がくみ取っていることはそれだけではない。大岡昇平は、「われわれの」「文学の理念をこわ」すような作品つまりは「大衆文学、中間小説」から、「文壇」を守ろうとしたのだというのである。そして次のように述べている。「反権威の立場を買いたといわれる大岡昇平が、こと文学に関しては、伝統と文壇を守ろうとしてこのような権威を振り廻さなければならなかったことは記憶にとどめておいてよい。」

このような捉え方が、はじめに述べていた結論、すなわち大岡は『蒼き狼』を「駄作だとか失敗作だか思った」のではないということとどのようなつながっているのかがいまひとつはつきりしない。というのも、大岡の「その後」の発言を大量に引用しながら述べていたその口吻には、大岡は『蒼き狼』を決してダメな作品と考えていたわけではなく、いわば批判するために批判していたにすぎない

というようにしていたことが見てとれるからである。裏がえしていえば、大岡は実は『蒼き狼』を評価していたのだという見方である。

だがそうであるなら、『蒼き狼』を明らかに「大衆文学」ないしは「中間小説」として否定的に捉えていたであらう先のようないい方とは一見矛盾することになる。そこにはいわばもう一つの屈折が必要である。考え得ることは、大岡は本当は『蒼き狼』を評価していないが、それが「大衆文学」ないしは「中間小説」と見られているがために否定していた、あるいは否定してみせていたと見ることである。あるいは、大岡はいわゆる純文学としては「駄作」または「失敗作」と見ていたが、「大衆文学」「中間小説」としてはそう考えてはいなかったと見ることである。いずれのように考えているのか、はたまたそれとはまたちがった見方をしているのかは論を見る限りにわかに判断することができない。だが、いずれにしても大岡を少々馬鹿にした見方であることに変わりがない。改めていうまでもないが、大岡が論争において批判していたのは「大衆文学」や「中間小説」としてではなく、あくまでも歴史小説としてであったからである。

曾根は、大岡は結局「伝統的な文壇意識から抜け出すことはできなかった。」と述べている。このようないい方にあえて異を申し立てるつもりはない。また、「文壇意識」をいわゆる純文学あるいは純文学意識とでもおきかえれば賛意を呈しようと思う。だが、論のはじめの方で曾根は、「私自身、その意識（ここでは「伝統的な文学意識」といっておりそれをさす——引用者注）から完全に自由になっているとはいえない」と正直に述べていた。むろん、私もまたそうであ

る。曾根は「大岡昇平ほどの人でも、……」といいつつ述べていたが、それは買いかぶりというものである。というよりも、それは相手をより効果的に攻撃するための勝手な前提にすぎない。「大岡昇平ほどの人でも」「伝統的な文壇意識から抜け出すことはできなかった」ことは、何も異とするに足りないのである。もともと自分たちの「伝統や世界文学に関する知識に基いた文学の理念」に裏うちされた文学（意識）を、簡単に放棄できるはずはもとよりなく、またそうややすと放棄していたのでは大変なことになる。それを「守ろう」とするのは、いわば当然のことであろう。それは、「権威を振り廻」す云々といったことは全く別のことである。

#### 四

曾根は次に大岡の『歴史小説の問題』（文芸春秋、74・8）に触れ、論争以後も大岡の考えは基本的に変わらなかったことを指摘している。その指摘は正しいが、論争における大岡の捉え方がもともととやまっている以上当然ここでの捉え方にもおかしな部分がある。だが、くりかえしになってしまふところも多くなるのでここではないいち取り上げない。

さて、大岡の「その後」を執拗に追求してきた曾根は、ここにきてようやく井上の「その後」に触れている。だが、それについてはすでにはじめの方で指摘した。すなわち、論争後井上は「結果的には」「大岡の批判を受け入れる方向」、つまりは「史料に忠実な書き方」に変化したというものである。そこには、「大岡昇平のような考

え方」に「従った気配がないでもない」と述べていたが、しかし変化の理由をそれだけに求めるのはあやまりだという。「というの、同様な変化は、歴史小説だけでなく、同じ時期の新聞小説にも、短篇にも認められるからである」。井上靖の作品についてごく簡単に概括して述べたかったことは、つまり「井上靖が書くとしたのは最後まで小説であり、歴史や伝記や記録ではなかった。」という点にある。そして次のように続けている。「歴史小説は歴史でなければならぬ」と考えた大岡昇平に対して、井上靖は歴史小説といえども小説でなければならぬという点にこだわったのである。」

「歴史小説は歴史でなければならぬ」と大岡が考えていたわけでは決してないことは、これ以上くどくどと述べるつもりはない。ただ、このような議論はいいかげんもうやめにして欲しいと願うだけである。このような発言はこれまでに何度も行なわれてきた。しかし、そのような議論に意味がないこと、はつきりと無効であることは今や明確なのである。歴史小説があくまでも小説であることをいいたい誰が否定するであろうか（歴史小説そのものを否定するものがあるとしても）。あくまでも小説であるからこそ、いわば歴史（記述）とはちがうものとしての小説であるからこそ、問題になり得るのである。歴史小説が歴史（記述）なら、あるいは歴史小説が他の小説と同じいわば単なる小説であるということだけなら、歴史小説の問題といったことなど起こりようがあるまい。歴史（記述）と小説というちがったものが、いわば形容矛盾のように合体したものであるからこそ様々な問題が生まれてくるのである。先の発言は、大岡ばかりではなく誰もが否定する主張を一方に仮構することによつ

て、歴史小説は小説であるという当りまえのことを述べたにすぎない。しかも、それがあたかも対立点であるかのごとくに、いわば二重に仮構していたのである。

断わっておけば、以上述べたようなことは、外ならぬ大岡昇平が論争において、またその後の歴史小説論においてもくりかえし述べていたことであつた。私はそれを大岡から学んだのであり、私流にいいかえたにすぎない。大岡の発言において、そして同時にこの論争において最も重要な指摘はたぶんその点にあつた。たとえば大岡は、井上が森鷗外の『歴史其儘と歴史離れ』におけるものいいを借りて、『楼蘭』が『歴史其儘』であるといっているのを「まったくお笑い草」と否定すると同時に、『敦煌』が『歴史離れ』であるというのも「ナンセンス」と批判していた。『敦煌』を『歴史離れ』であるとするをも大岡が否定するのは、架空の主人公を設定していわゆる歴史の秘密を解くといった作品など、そもそも歴史から離れるか否かといった次元にはなく、それ以前の問題だと考えていたからである。『歴史其儘』と『歴史離れ』を両極として、そのあいだにいわば無数の歴史小説が存在する、どこをとつても歴史小説に変わりはあるまいといった発想からは、そもそも歴史小説の問題、歴史と文学の問題など生まれるわけがないというのが大岡の根本的な問いだつたのである。大岡は、「歴史がジュースみたいに、量的に加減出来るものとして考えられているのは、異とするに足りる。」と述べていた。いくら水で薄めてもジュースはジュースだといった発想では歴史小説の問題は解けないのである。この問題について最後に大岡は、次のように述べていた。「歴史小説は歴史から離れなくては書け

ない。しかし、逆説めいて恐縮だが、人は歴史に忠実であることによつて、はじめて歴史から離られるのである」。これは決して逆説でもなく、また「逆説めいて」もない。付け加えていつておけば、『歴史其儘と歴史離れ』や鷗外の歴史小説に対する大岡の見方にも、問題がなかったわけではないことも私は指摘しておいた。

以上の点をおさえれば、先の発言に続く次のようなことばではじまる以下の展開がほとんど意味のないことは明らかである。「歴史小説は歴史か小説かということになると、問題は『大岡昇平』のように史実に忠実であるかどうかというだけでは済まされなくなってくる」。曾根はこのように述べ、問題は「事実 (fact)」だけではなく、「真実性 (reality)」にあると主張するのである。「前者を重視し」たのが大岡で、「後者を重く見た」のが井上だというお決まりの図式がまたそこで提示される。大岡は確かに「事実 (fact)」を「重視」したが、同時に「真実性 (reality)」をも「重く見」ていた。たとえば大岡は、『楼蘭』を「氏の空想はつゞまじやかに、しかし大変現実的に飛翔している」といい、また『洪水』を「フアンタスティックな自然との戦いの描写で、氏の空想は意外にリアリスティックである」と述べていた。『蒼き狼』や『敦煌』を批判する一方、それらの作品をそのように評価していたのである。もちろん、大岡はそれらの作品をも歴史小説とは見ていなかった。そして、歴史小説であるならばある程度「事実 (fact)」に基づかない限り「真実性 (reality)」もまた獲得できないのであり、それが歴史小説というものだといつていたのである。この点に関してはだが、これ以上論を追つていく必要はもはやない。井上靖の歴史小説に関する発言の部分は、他の井上に関する

発言と合わせて稿を改めて論じるしかない。<sup>(7)</sup> 曾根と私の対立点の二つ目がそこにあるからである。

論はいよいよ最後の段を迎える。「このような井上靖に対して、大岡昇平は、歴史小説と歴史の違いを飛び越えたにもかかわらず、歴史と歴史小説の文体については理論的に踏み込んで考えようとしなかったように見える。」と述べている。これは、何をいおうとしているのか少々わかりづらい。「歴史小説と歴史の違いを飛び越えた」とはたぶん、先に述べていた「歴史小説は歴史でなければならぬと考えた」ということを指すのであろう。だがそうであるなら、それに続くものはいわば当りまえのことで、「にもかかわらず」と逆接につながるのがよくわからない。あるいは「歴史と歴史小説の文体」をいわば二つの「文体」とせず、「歴史＝歴史小説の文体」とでも解釈できないこともない。だがその場合でも「にもかかわらず」はいまひとつしっくりこない。もう一つ推測できなくはないことがある。それは、「歴史と歴史小説の文体」のちがいが、「については理論的に踏み込んで考えようとしなかった」ので、「歴史小説と歴史の違いを飛び越えた」とすることである。これならば論旨は明快だが、しかしそうであるならそう書いたであらう。

要するに発言の意図がよくわからないのだが、いずれにしても大岡は「歴史小説と歴史の違いを飛び越え」ていたわけではない。ただ、大岡が「歴史と歴史小説の文体については理論的に踏み込んで考えようとしなかった」という批判はまちがいではない。だが、同時にそれは正しくもない。というのは、傍線を付した「理論的に」及び「踏み込んで」をどう評価するかによってその判断は異なるか

らである。つまり、大岡が全く「考ようとしなかった」というわけではないのである。曾根もすぐ後に、「もつとも『歴史小説の問題』が文体の問題にまったく触れていないというわけではない。」と述べている。だが、要するに「理論的」ではない、あるいは「踏み込んで」はいないという判断なのであろう。

私は、「理論的に」充分に「踏み込んで」はいなかったというのなら賛成である。大岡は「理論的に」かつ「踏み込んで」よく考えようとしていたというのが私の判断である。というのも、大岡以前にそれ以上、文体についてのみならず歴史小説の問題全般について「理論的に踏み込んで考えようとし」た人を、少なくとも日本において私は知らないからである。曾根は「歴史小説の問題」(『文学界』、74・6)から「三例を上げて、しかしせいぜいそこまでで、その先を考えようとはしていない。」と述べているが、卒直にいつて私は、単行本『歴史小説の問題』にも収められている他の一連の歴史小説論(『文学界』、64・3・11)も含めてもう一度読み直して欲しいと思う。大岡の「その後」を追跡していた曾根は、不思議なことにその一連の歴史小説論には全く触れていない。先に単行本『歴史小説の問題』に触れていた際にも、言及していたのは論文「歴史小説の問題」における発言だけであった。

曾根はすぐ後に再び、「日本において歴史と歴史小説はどんな文体で書かれてきたかを大岡昇平はもう少し歴史的、理論的に考えるべきであったと思う。」とややいい方をかえて述べているが、私はもはやこのような方には反対しない。大岡は「歴史的、理論的」に考えようとしていたが、それが充分であったわけではなく、「もう少し

し」考えてみるべきであつたしまたその余地はあつたという意味において。全てを大岡に求めてもはじまらない。大岡の後をつぎ、「日本において歴史と歴史小説はどんな文体で書かれてきたか」を明らかにしなければならぬのはわれわれなのである。

## おわりに

一つの論文を取りざたにして論じることがあまり好ましいことではないことを私は承知している。だが、『蒼き狼』論争についてはまさに「大岡昇平の圧倒的な勝利」という「通説」が広く行きわたっているだけで、具体的な検討がほとんどなされてこなかった。私が論を書いたときには、特に取り上げるべき論がなかったのである。曾根の論は多くの点で拙稿とは対立し、またこれまでにはなく詳細に検討された論ゆえ、ぜひとも取り上げなければならぬ論として立ち現われたのである。その点で、本論はかつて発表したものとの補遺としての意味ももっている。あえて書こうとした理由はそれだけではない。何よりも、これを機に『蒼き狼』論争についての、ひいては歴史と文学、歴史記述と歴史小説についての本格的な論争が広く起こればと考えたからでもある。それは、大岡が何度かしかけてついに実現しなかったことでもある。そのためには、事実関係やそれに対する基本的な認識を最低限確認しておきたかった。やや瑣末な点にわたるまで少々こまごまと述べてきたのもそのために外ならない。論争はこれからである。本論に対する、そしてかつて述べた論に対する具体的な批判をいただいた上ではじめてスタートライン

に立つことになる。

## 注

- (1) 拙稿「大岡昇平における歴史(一)」(『北海道大学文学部紀要』第41巻第2号、'92・10)。
- (2) 大岡昇平「蒼き狼」は歴史小説か——常識的文学論(1)——「群像」、'61・1。
- (3) 井上靖「自作『蒼き狼』について——大岡氏の「常識的文学論」を読んで——」(『群像』、'61・2)。
- (4) 大岡昇平「成吉思汗の秘密——常識的文学論(3)——」(『群像』、'61・3)。
- (5) 護雅夫「蒼き狼・狗・「灰色の狼」」(『井上靖歴史小説集月報』4、岩波書店、'81・9)。
- (6) 拙稿「大岡昇平における歴史(二)」(『北海道大学文学部紀要』第42巻第1号、'93・7)。
- (7) 井上靖のいわゆる歴史小説については、拙稿「井上靖のいわゆる歴史小説のために——『蒼き狼』論争を越えて——」(『国文学解釈と鑑賞別冊 井上靖 詩と物語の饗宴』、'96・12)において述べた。

(しばぐち じゅんいち・帯広畜産大学専任講師)

(一九九七・一・三二)